机上の遭遇

小松左京

机上の遭遇

小松左京

机上の遭遇

一九八二年十一月二〇日　第一刷発行

定　価　九八〇円
著　者　小松左京
装丁者　山藤章二
発行者　堀内末男
発行所　株式会社集英社
一〇一　東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話（〇三）二二三八―二八四二（出版部）
二二三八―二七八一（販売部）
印刷所　中央精版印刷株式会社
0095-772412-3041
© S. Komatsu, Printed in Japan, 1982
検印廃止。乱丁・落丁本はお取替えします。

机上の遭遇——目次

I

巨人の輪廓——江戸川乱歩——11
山岳と地下世界のロマン——国枝史郎——19
「不良少年」小説——牧逸馬——25
高木文学への私見——高木彬光——32
戯作の真骨頂——山田風太郎——36
『壁』の思い出——安部公房——40
酔わせる話術——司馬遼太郎——44
洗練された「花」——結城昌治——47

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

批評の「毒」をふくんだ小説——小林信彦——50
「学兄」としての米朝師——桂 米朝——53
現代大阪女語作者(いまのなにわのめがたりびと)——田辺聖子——57
成熟した女の視点——夏樹静子——68

II

〝ドカッ〟と私の前にあらわれたプロSF画家——生頼範義①——73
この人は本当に日本人か?——生頼範義②——78
「SFは絵」の実践者——加藤直之——83
家族の一員としての〝妖精〟——藤子不二雄——95

若い子供漫画家たち——関 一彦——97
「ナントカと天才は紙一重」——モンキー・パンチ——101
体験としての漫画史——108
ノヴァ！を待つ——難波弘之——121
美しく精悍な「生き物」——柴田三雄——124

III

桑原学校のこと——桑原武夫——131
今西学の示唆するもの——今西錦司——135
"生の哲学(フィロソフィエ・デス・レーベンス)"の復権について——梅原 猛——140

高橋和巳の姿勢——高橋和巳①——154
「内部の友」とその死——高橋和巳②——158
「士大夫」としての作家——山崎正和——217
友をもつなら食いしん坊——石毛直道——222
〝太陽の塔〟そして……——岡本太郎——226
解説——土屋裕——238

机上の遭遇

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

I

* 巨人の輪廓――江戸川乱歩

青春のころに、自分では「卒業」してしまったと思っていた『乱歩全集』に、もう一度手を出すことになったのは、二年ほど前――万国博のテーマ館の地下部分のプロデュースをひきうけた時の事だった。

それまで私は、「環境情報」とか、「雰囲気情報」とかいったものに興味を抱いていた。人間は何も文字や音声、映像といった、はっきり「情報」として加工されたものだけから情報をうけとるわけではなく、ある場所へ行ったら、その場所の何とはない雰囲気、第一印象といった形での「情報」をうけとり、これが人間の「態度」や「行動」を決定する上に、きわめて大きな役目をはたすような気がしたのである。――名園とよばれる庭園や、大宗教以前の古代生活でなんとなく神聖視されてきた場所、それに大寺院などを歩きまわっているうちに、はたして昔の人たちが、明確に意識してかしないでかどうかわからないが、とにかく巨大な山岳、森林、巨岩、渓谷、谷風といった「自然」をたくみに利用し、そこを、ある順序にしたがって「移動」させて行く事によって、移動する人間に、さだかではないがある基礎的な「雰囲気情報」をつたえるための

「演出」がなされている痕跡を発見して、ただ一つの直感をたよりに、それこそ「口ではいえない」巨大な象徴の構図をつくり上げて行った古代の天才たちの、天地をおおうような雄大な心の一端にふれたような気がして、大いに興奮したものだった。それにくらべれば、後世の造園術における「借景」や山水造形の思想など、いかにもちまちました、「隠退者」の感覚であって、たとえば高野山の原型に見られるような、あるがままの自然の中からある場所をえらび、山岳、森林など、天地のひろがりをそのまま「象徴場」につかう雄大さにはくらべものにならない。

万国博のテーマ館の一部をひきうける気になったのも、実はこういった「環境」をつくることによって、ある思想、ある情報を表現する事ができないか――つまり、空間全体をメディアにつかい、その中を移動させることによって、言葉や図形を直接つかわずに、そういったものではあらわせない「何か」をつたえる事ができないか、という関心につながるものだった。しかしながら、テーマ館の地下は、かぎられかつとじられた空間である。とうてい東密のごとく、自然そのものを利用するといった雄大さは許されない。むしろ善光寺の胎内めぐりとか、戒壇めぐりにちかいものである。しかし、空海の時代とちがうのは、現代は、人工の光、電気的影像、音響の演出、自動人形、あらゆる新しい技術が駆使できることである。こういった人工の技術や、心理学上の「錯覚」を利用して、何かできないものだろうか?

こう思って、またしばらくあちこちの寺院や、博物館、夏祭の見世物に出てくる「お化け屋敷」、それに、当時あちこちではやり出したアングラ劇場やサイケバーといったものを、小まめに見てまわった。――しかし、見れば見るほどつよく感じられるのは、そういった「象徴場演出」に関する日本人のセンスの頽廃であり、文化の凋落だった。すくなくとも、そういった、筆

舌にあらわしがたい、しかも理や言葉の勝ったものではない、大衆の誰もが享受できる「シンボル的世界」に関しては、現代の、特に大都会の日本人は、昔にくらべてはるかにまずしいものしか享受していないのではないか、と感じさせられた。「サイケデリック」といったものも、一つは日本人の体力的な弱さに由来するのであろうが、本場ものの、おどろくほど豪華なしつこさにくらべて、みじめなくらいうすっぺらで、さむざむとしている。

そんな時、ふと思い出して、二十年近く手をふれなかった乱歩の作品集をひっぱり出してみた。——むろん、最初にひらいたのは『パノラマ島奇譚』だったが、かつて二、三度も読みかえしたこの作品を、もう一度読みなおしてみて、私ははげしいショックをうけた。サイケといおうか、ファンタスティックといおうか、とにかくそこで展開されている『パノラマ島』の構造の豪華さ、奇抜さ、絢爛さは、私の求めていたものをはるかに凌ぐ所があった。単なる空想ではない。人間がその異様な人工の「エンバイランメント」からうけるさまざまの感覚と、それを通じて人間の内面にまきおこる「情緒の嵐」ともいうべきものが、おどろくべき的確さで描き出されている。四十年も前に、これを書いたとすると、乱歩という人は、今まで自分が考えていたよりどえらい人物なのかも知れない。そう思って、それから手もとにあった作品をかたはしからひっくりかえしてみた。

ひっくりかえしているうちに、また妙な事に気がついた。というのは、自分が乱歩の作品を、ほとんど全部、読んでいる、という事だった。戦後の作品のいくつかは別にして、とにかく、子供ものまでほとんど読んでいる。（その中には、『青銅魔人』や『透明怪人』のように、戦後のものもあるから、こちらがだいぶ大きくなってから読んだものもあるらしい）大ていの作品は、

出だしの二、三ページを読めば、きのう読んだようにストーリイがうかんでくる。読んでいるうちに、そのほとんどは、戦時中の中学生時代から、旧制高校時代に読み、のこりは大学の卒業前後に読んだことが、だんだん思い出されてきた。——そして、一層奇妙な事は、ストーリイはほとんどおぼえているのに、いま読むと、昔とまったく同様に話の中にぐいぐいひきこまれて行くのである。乱歩の文章は、さほど凝ったものではないにもかかわらず、何というか、奇妙な人肌めいた熱気があって、数ページ読むうちにその熱気に次第に包みこまれ、彼の描き出す、あやしくもあつっぽい世界に、知らず知らずひきこまれてしまう。少年時代読んだ印象と、今読む印象が、こんなにちがわない作家というのも珍しい。

むろん、少年時代、納戸の奥などで、食事も忘れて読みふけった時とちがって、年を食っただけ、新しい発見もあった。——乱歩が、今クローズアップされつつある「環境芸術（エンバイランメント・アート）」についての、大変な先覚者である事の発見などもそれであって、その観点から私は、新たな興奮でもって乱歩の作品を読みかえした。——『パノラマ島奇譚』は、全篇これ「環境芸術」のアイディアの集大成のようなものであるが、そのほか、例の卓抜な「触覚芸術論」を展開する『盲獣』をはじめ、『鏡地獄』『大暗室』そして『人間椅子』『孤島の鬼』などもふくめて、作品のいたる所に視覚的であると同時に「可触的」「触覚的」なものがみちあふれている。——「触覚的」と「インヴォルヴ」という言葉は、ご存知マックルーハン以来、日本でも大いに流行した言葉であるが（そしてまた、マックルーハンのこの指摘は、一時期のブームでかたづけてしまう事のできない、重要な問題をふくんでいるのだが）乱歩は、最近になってようやく問題になりつつあるこういった新しい表現上の要素を、四十年以上も前に、実に奔放に、縦横に追求しているのである。それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com